

鎌倉時代前・中期慶派作例の金属製荘嚴具と髻（かざり）仏師

三本 周作（大阪大学大学院）

鎌倉時代の初頭、奈良仏師の傍流たる慶派の仏師たちが造仏界の中心に躍り出て、南都焼き討ち後の東大寺・興福寺を中心とした復興造像、鎌倉幕府関連の造像など、当時における中心的な造仏を多く手掛けていくこととなる。彼らの作例のいくつかは今日まで伝えられ、その造形に即した研究が盛んに行なわれてきた。そうした中で、1つの大きな流れを形作るのが、髻・着衣形式などに代表される、像の形式に分析を加えた研究である。これにより、慶派作例における「古典研究」「宋風摂取」の実態などが次々と指摘され、また、慶派仏師たちの間に表れた表現の個性やその展開の様相を捉えることも実現されている。

ところで、こうした慶派作例における形式研究の流れの中で、荘嚴具の意匠形式が取り上げられたことはほとんどない。初期慶派作例の荘嚴具を検討された礪波恵昭氏や、天冠台の意匠形式について検討された武笠朗氏の論考が、ほぼ唯一といってよいだろう。平安時代末期から鎌倉時代にかけて、仏像の荘嚴具を像本体とは別に金属を素材として制作し、像に取り付ける表現が盛んになる。ゆえに像本体との一具性が疑われる場合もあり、おそらくこうした事情もあって、これら金属製荘嚴具の意匠形式が検討の俎上に上げられることがなかなかなかったのだろう。しかし、当期の作例には、像本体と同時期の作と見なし得る金属製荘嚴具も少なからず遺存しており、これらの分析対象としての有用性は捨て切れるものではない。本発表では、以上の前提に立ち、慶派作例の形式研究の対象の1つとして、鎌倉時代前・中期〔源頼朝が鎌倉幕府の権力を確立した文治元年（1185）から仏師運慶の長子湛慶が没した建長8年（1256）まで〕の慶派作例に付属する、像本体と同時期の作と見なし得る金属製荘嚴具の意匠形式に注目したい。

さて、当期の慶派作例に付属する金属製荘嚴具の意匠形式を通覧すると、それらが作例間で共有される例がしばしば認められる。しかし一方で、意匠形式は共有されながら、彫金技法等において大きな差を示す例も少なくない。このことは、慶派仏師の間で共有された、荘嚴具の意匠形式の定型のようなものが存在したことを示唆すると同時に、荘嚴具の意匠形式と彫金の特徴が対応関係にないことから、意匠考案の工程と制作の工程とで各々の担当者が異なっていた可能性をも示しているように思われる。

当時、仏像の金属製荘嚴具の制作を手掛けたのは、「髻（かざり）仏師」と呼ばれる工人であったと考えられている。彼らについては谷信一氏の研究が端緒となり、以後、部分的に言及する論考が森末義彰氏・清水善三氏・原田一敏氏らによって発表され、「金属製荘嚴具の制作及び飾り付け」を主とした彼らの作業内容が明らかにされた。しかし、各氏の研究で主に拠り所とされたのは文献資料であり、その次の段階として、「髻仏師」の作品としての金属製荘嚴具そのものに即した分析が必要となってきた。本発表では、上記のような像本体と金属製荘嚴具との関係を手掛かりに、「髻仏師」についても、仏像制作における位置づけ、仏師との関係のあり方などの問題を中心に考察を及ぼすこととしたい。